明治中期のインド哲学と井上円了のインド哲学観

出野尚紀
ideno naoki

はじめに

東洋大学の学祖井上圓了(1)（以下円了）の著作の一つに『外道哲学』(2)がある。なぜこれを書いたのか。構成にどのような特徴があるのか。先行研究や参考文献としてどのようなものを使ったのか。当時、円了以外にインド哲学についてまとめたり、紹介したりした人はどのようなものを書いたのかということを調べたい。

幕末の開国により、オランダとの交易で手にしていたオランダ語で出版された実学書を中心としたそれまでの蘭学だけではなく、ひろくヨーロッパの文物を学ぶ機会を得ると、それまでの日本になかったため、新たに知ったヨーロッパの概念にたいして、意味を規定する作業が必要であった。そのために、儒教的知見に基づき漢文を充分に操れた当時の学者たちは、漢語を利用して意味を派生させたり、漢字を新たに組み合わせて意味を表す熟語を作ったりということを行った。そうした概念のなかに、西周が、明治七（一八七四）年に『百一新論』のなかで、「賢哲を愛し希求する」という意味で英語のphilosophyから訳語として創り出した「哲学」がある。「哲学」を特定の命題に対して根本を突き詰めていくのみならず、人間観、世界観までにわたる理論的基礎を獲得する学問として捉えることは可能であろう。円了にとっては、それが、それまで日本人がヨーロッパに持っていた

イメージであったキリスト教を離れて、純粋に学問的真理を求めることと、新鮮に感じられたと思われる。

そもそも円了は、越後国の真宗末寺の長男として、嘉永七（一八五四）年に日米和親条約が結ばれ開国したばかりである安政五（一八五八）年に生まれた。しかし、同じ越後国内の新潟港が日米修好通商条約で開らかれた港であったこともあってか、円了には、少年期から青年期に、仏教だけではなく儒教と英語による西洋伝来の学問やキリスト教を学ぶという時代があった。教団からの使命として京都教師教校、東京大学と新潟を離れて学んだ。とくに東京大学では、教団立て直しのために西洋思想を学ぶ、孫子にいう「彼を知り己を知る」ということを行った。そうして、円了は、維新と海外知識の取得によって、それまでの伝統的な概念からの転換を身に付ける必要性を感じたからこそ、哲学の啓蒙ということに一生涯を賭けよう企図したのであろう。

しかし、一方で自分が仏教徒であるということ、そして、日本人であるということ(3)の二つのも、円了の中で大きなウエイトを占めていた。仏教徒であることから、明治三五（一九〇二）年十一月から翌年七月にかけて行った二回目の世界旅行の際、ヨーロッパへ西回りで赴いた途次にインドに立ち寄り、亜大陸を陸路で横断し、当時の日本人がまだほとんど行っていなかった仏跡参拝を行った。十二月十四日にコルカタ(4)に到着し、同月二十三日に、一八日にコルカタからのダージリン行に同行した河口慧海を同行者としてコルカタを発ち、翌日、バンキポール駅で藤井宣正(5)と会い、ガヤーから大谷光瑞に随伴してブッダガヤーを詣で、ナイランジャナー川両岸を逍遥している(6)。そのなかで、ブッダガヤーで作った詩では、「遠来常道地、俯仰思何窮」(7)と感歎きわまりない気持ちを詠っている。また、日本人であることについては、明治四十五（一九一二）年、大正元年の七月八月の明治天皇の崩御の前後には、箱根に避暑と著述をかねて赴いていたが、「十六日、家事のために雨をおかして帰京せるに、その後、聖天子御不例にわたらせるるを聞き、登山を見合わせたり。いよいよ御危急の

報を聞き、和田山哲学堂に立てこもり、御回復を祈りしも、間もなく崩御の凶報を拝受し、驚愕恐懼おくところを知らず。拙作をもって敬弔謹悼の至情を表し奉る」(8)と、状況が異なったとはいえ、昭和天皇不例のさいの社会状況を大きく超えた慌てぶりを示している。さらにその後、明治天皇を偲んで「哲学堂内に籠居して、謹悼敬弔の微弔を表し奉り」(9)と、謹慎したりしている。

また、円了は自身の信条について、明治二十年に『仏教活論序論』において「護国愛理」を挙げており、学者でなくとも人として真理を追い求めることと、人間として国を護り社会に尽くすことは、「卵が先か鶏が先か」と同じく、分けることができない大切な事柄であるといい、「護国愛理は一にして二ならず」(10)としている。しかし、その向いている方向は反対なので、同時にできる人はいないが、どちらかを突き詰めていくべきだとし、自分は愛理であるといっている(11)。当時「護国」という考え方が表明されたのには、例えば、福沢諭吉の『西洋事情』や、久米正武の『米欧回覧実記』などで示された工業化が進んだ社会の姿とアヘン戦争以降の清の状況の影響から、「日本も、ヨーロッパの帝国主義国家によって清のような草刈り場にされる危険性が高い」という危機意識から「不羈独立」という意志が、インテリ層を中心に存在したことがあると思われる(12)。その円了なりの方策の一端が、歴史的に学問的知識がしっかり備わった文明国であり続けているということで、現れているのではないだろうか。

そのような考えもつ円了が提出した博士号論文が「仏教哲学系統論」である。そのなかでは、仏教だけでなく、ヒンドゥーの正統派も同じようにインド派生の哲学学派と見られて論証されている。『外道哲学』がまとめられるまでに、円了はインド哲学についてどのような知見を得ていたのだろうか。

1．当時のインド学受容

さて、日本において、「印度」は、直接的な人的交流が皆無に近かった(13)ため、仏教の経論による知識の受容によった。そして、印度は仏教というバイアスばかかった「印度」であり、ヴェーダに端を発する伝統を保持するヒンドゥーの正統的な哲学学派は「外道」と扱われていた。その上、漢文に翻訳された上で、日本にまで伝わった正統派の経典に相当する文献は、ヴァイシェーシカ学派(14)の『勝宗十句義論』とサーンキャ学派(15)の『金七十論』の二つだけであった。それら以外は、経論に引用されたり、中国でさらに論が立てられたりしたものであった。その他に、インド現地がほとんど分からない日本人にとって重要だったものが、玄奘や法顕などの求法僧が記した旅行記や彼らへの伝記であった。それらのなかでどのようなものを使ったのかは、『外道哲学』のなかの「参考引用書目」(16)があり、そして、『井上円了選集』第二二巻では、巻末に項目立っている「書名索引」(17)、「著者別書名一覧」(18)、「仏典略称・別称一覧」(19)、または「引用仏典と大蔵経等との対照表」(20)によっても知ることができる。

ところで、安政の開国以降、ヨーロッパから導入した知識も使ったインド学の論文発表はどのようなものが見られるのだろうか。日本のインド学は、イギリスのオックスフォード大学へ留学しマックス・ミューラーについてサンスクリット学を学んだ、南條文雄と笠原研壽を始めとする。笠原は留学中に死去したが、南條は明治一七（一八八四）年にMaster of Artsの称号を得て帰国した。明治中期には、インド学においてもヨーロッパから学んだ学問体系に基づくものがみられる。しかし、南條の帰国以前から、漢訳文献を基とする伝統的な教説を新たな知見から補強するようなもの、逆に伝統説が正しく開国によって伝わった知見が間違っていることを唱えるものがあった。そのようなインド学の状況において、明治元（一八六七）年から、『外道哲学』が出版された明治

三〇（一八九七）年二月であるのでその前年明治二九（一八九六）年までにどのような発表がなされたかを確認したい。

まず、石山洋らが編集した『明治・大正・昭和前期 雑誌記事集成第三九巻 東洋史二』でインド学、または、インド社会に関連する論文を調べた。「八 印度」では、一般、民族・風俗、思想、社会・経済、政治、人物、語言・文学、印度仏教、美術工芸・考古学、対外関係、雑載と十一種類に分類されている。「一般」には、明治二八（一八九五）年に、淺井豊久の「ダット氏古代印度文明史に就いて」が『東洋哲學』二巻一号にある。次に「民族・風俗」には、明治二七（一八九四）年に、エドキンスの①「佛教と印度舊神話との關係」が『東洋哲學』一巻八号、九号にある。明治二八年は、井上哲次郎の②「釋迦ハ如何ナル種族ナルカ」が『太陽』二巻二号に、それに対する那珂通世の③「釋迦種の説に付きて井上文學博士に質す」が『史學雑誌』六巻一一号にある。翌明治二九年に、片桐盛治④「印度ノ婚禮并婦人地位」が『太陽』一巻一〇号にある。また、那珂は、充分な返答を得られなかったか、黙殺されたかしたため、この年に再度⑤「釋迦種ノ説ニツキテ井上博士に質ス」を『太陽』二巻二二号に発表している(21)。「思想」には、円了もあるが、その他に四編がある。明治二七年に姉崎正治が①「婆羅門教の化身説」を『哲學雑誌』九九号、一〇〇号に発表し、明治二六、二七年に木村鷹太郎が②「印度最古の哲學「ウパニシャッド」を論ず」を『哲學雑誌』の八二号から八五号に、明治二八年には淺井豊久の③「印度哲學諸派」があり、明治二九年に高山林次郎が④「印度思想ノ梗概」を『太陽』二巻七号に発表している。「社會・經濟」には、明治二九年に山内晋卿の①「印度古代ノ社會起源説一斑」が『太陽』二巻一九号に見られる。そして、佐野常樹の②「印度田賦法」(22)、阪谷芳郎の③「印度貨幣制度改革及其の影響について」(23)、土子金四郎の④「印度制改革評論」(24)がある。「人物」には、村上専精に①「釋迦牟尼佛一代記参考書目」(25)、②「釋

迦牟尼佛出誕入滅の年代考」(26)、③「釋迦牟尼佛出誕入滅の月日考」(27)、④「釋迦牟尼佛の出家並に成佛の年齢考」(28)、森昌憲に⑤「馬鳴菩薩年代考」(29)という六編が挙がっている。「語言・文学」には、南條文雄の①「印度語の沿革及發達」(30)、姉崎正治の②「印度戯曲ノ濫觴」(31)の二編がある。「印度佛教」には、フエールの①「印度地獄説」(32)、釋守愚の②「印度宗教事情」(33)の二編がある。また、「政治」、「美術工芸・考古学」、「対外関係」、「雑載」には、該当年代の発表は見られない(34)。

そして、同シリーズの『人文科学編四〇巻 仏教学 一』では、「第四編 宗教」のなかに「一 印度哲學及宗教」があり、さらに総説、吠陀及奥義書、各派の教義、雑と四つに分類されている。なお、この第四編には二百九十三の論文が列挙されている。第一の「総説」からさらに見ていくと、円了が東京大学の学生時代に「東洋哲学」という科目名で『八宗綱要』などを講義した原坦山が、明治二〇年①「印度哲學要領」を『哲學雑誌』一巻三号、『教學論集』四四号に発表をしたのを始め、同年の『日本之教學』一号に②「印度哲學」、翌年に③「印度哲學の實驗」(35)という三編がある。山崎太吉に④「印度宗教哲學略論」(36)。フランレスハイルに⑤「印度哲學」(37)。鳥尾得菴に⑥「斷常二見論」(38)。吉田賢龍⑦「佛教以前に於ける印度思想發達の一瞥」(39)。村上専精に⑧「東洋古代哲學競起の概況」(40)。井上哲次郎に⑨「東洋の哲學思想につきて」(41)。阿滿得聞に⑩「内外撮要生起論（印度一般の縁起説）」(42)。水谷仁海に⑪「印度宗教の沿革」(43)。モズームダルに⑫「印度に於ける宗教問題」(44)。大鳥圭介に⑬「印度古代宗教概論」(45)。菅虎雄に⑭「印度古代の宗教の發達」(46)。加藤熊一郎に⑮「佛教以前の宗教」(47)。三好愛吉に⑯「印度太古の崇拝一斑」(48)。高山林次郎に⑰「吠陀以前の信仰及其歴史的發達」(49)。佐々木孝甫に⑱「印度宗教界の形勢」(50)。作者不明のものに⑲「印度哲學一斑」(51)、⑳「印度哲學と希臘哲學との関係につき」(52)、㉑「印度近世宗教改革者」(53)、㉒「印度寡婦殉死 マ氏比較神話論

抄出」(54)、㉓「カントと印度宗教」(55) がある。以上の総計二十三編が挙がっている。次に、「吠陀及奥義書」には、始めに明治一五（一八八二）年、名前不明の菅文學士(56) による①「四韋陀の一班」『佛教公論』六、七号がある。その後に、潜堂學人に②「四韋陀概論」(57)。藏原惟郭に③「四韋陀の梗概及哲學」(58)。著者不明の④「四韋陀時の地理（ルードウヰヒ氏梨倶吠陀より抄録）」(59)。三好愛吉に⑤「宗教史上に於ける韋陀教の地位」(60)。そして、木村鷹太郎の⑥「印度最古の哲學「ウパニシャッド」を論ず」(61) まで六編が挙がっている。「各派の教義」には、円了の論文も挙がっているが、円了については項を改めるので除き、以下の三十三編が挙がっている。浅井豐久に、明治二七（一八九四）年の七月発行の『東洋哲學』一巻五号から連載された①「印度哲學諸派」を始めとして、②「印度哲學諸派」(62)、③「婆羅門教一斑」(63) がある。潜堂學人に④「婆羅門教の研究」(64)、⑤「婆羅門風俗一斑」(65)、⑥「加藤氏の「ニヤヤ哲學に就て」に就て」(66)。Gyanendra N. Chakrariarti に⑦「婆羅門教一斑」(67)。P. R. Telong に⑧「婆羅門教に就て」(68)。姉崎正治に⑨「婆羅門教の化身説」(69)。藏原惟郭に⑩「婆羅門族の崇拜及祭禮」(70)。松山哲雄に⑪「婆羅門教の起原及其教理」(71)。小柳司氣太に⑫「婆羅門教と他教との比較の一部」(72)。好山隆俊に⑬「金七十論の話」(73)。南條文雄に⑭「金七十論（解題）」(74)、⑮「印度哲學數論派の綱領」(75)、⑯「印度哲學數論の綱領」(76)、⑰「印度哲學數論綱領」(77)、⑱「勝宗十句義論（解題）」(78) が挙がっている。加藤熊一郎に⑲「サンクフヒヤ哲學（數論）を論ず」(79)。松本亦太郎に⑳「印度哲學僧佉論」(80)。安藤正純に㉑「迦毘羅氏僧佉哲學」(81)。狩野享吉に㉒「數論派哲學大意」(82)。村上專精に㉓「印度哲學勝論概略」(83)、㉔「印度哲學勝論の概要」(84)。渡邊又次郎に㉕「勝論派の哲學」(85)。加藤秀旭に㉖「勝論宗十句義」(86)。加藤咄堂に㉗「ニヤヤ哲學」(87)。井上哲次郎に㉘「尼夜耶と尼犍子の別」(88)。また、作者が仮名を名乗るものに第六經緯子を名乗った㉙「婆羅門教徒の二大要神」(89) と、落木子㉚「吠檀多學派と大乗佛教」(90) があ

る。そして、著者不明のものに㉛「ドイツセン氏の吠檀多論」(91)、㉜「闍伊那教 ジオンガーレット氏の古典辞彙より」(92)、㉝「スワミ、ヴイエカナンダ氏所説」(93)が挙がっている。最後の「雑」には、明治一八(一八八五)年、天野爲之が『教學論叢』二三号から三〇号に発表した①「天帝存否」を始めとして七編が挙がっている。その他には、齋藤唯信に②「魔とは何者ぞ」(94)。阿刀宥乗に③「大自在天足跡伽藍と裸形外道」(95)。高山林次郎に④「印度思想の梗概」(96)。山内晋太に⑤「印度古代の社會起原説一斑」(97)。大宮孝潤に⑥「孟買宗教各派視察一斑」(98)。井上哲次郎に⑦「渡邊國武氏の印度哲學小史を讀む」(99)の名が見える(100)。

次に、三橋猛雄編集の『明治前期思想史文献』(101)を、著者名、書名とその参考記述について調査した。「哲學」では、明治二〇年に渡邊國武(102)の『印度哲學小史』がある以外は、ヨーロッパ、中国、日本のものばかりである。「宗教」では、佐田介石(103)が、須弥山説に基づく天動説によって宇宙を説明する『須彌須知論』を明治一〇(一八七七)年に出版し、田中久重の万年自鳴鐘(104)のように、一目で世界の構成が分かるような、須弥山を中心とする世界を模型で表した視実等象儀を勧業博覧会に出した(105)。そして、その解説をした明治一〇年の『視實等象儀記初編』と明治一三(一八八〇)年の『視實等象儀詳説』がある。その他、佐田介石には、刊年不明の『雰圍論』と明治一二年の『佛教創世記』が挙げられているが、内容については管見の範囲にない。佐田介石の一連の著作を除くと、キリスト教が多く、他には、日本仏教と神道に関する文献である。

さらに、『教學論集』の第一編から第三十編についても調査し、重複を除くと、三編が該当した。明治一七年四月発行の第四編一頁に、原坦山の①「印度哲學諸學ト徑庭アル説」がある。これは、無明と迷い、そして、それらの知による滅という仏教の教理は、儒教にも西洋哲学にも見られないという、明治一七年三月二十日の東京大學哲學會において行った演説の概要である。「印度哲学」とはいいながら、仏教についてのみしか言及してい

ない。明治一八年一月発行の第十三編から同年十一月発行の二十三編まで、南條文雄の②「印度文學雜誌」が連載されている。「雜誌」とは、雜多な内容を記すということであり、サンスクリットについて、ギリシア語との類似、パーニニ以降の略史、当時のヨーロッパにおけるサンスクリット熱の状況、漢語音写のルールについて、ダーラーシーコーらムガル朝時代のサンスクリット文献翻訳について、そして、ヨーロッパのサンスクリット文法書の紹介が記されている。明治一七年十二月発行の第十二編から明治一八年十一月発行の二十三編に連載された石川舜台の③「佛教論評」では、第二十編において、ブラフマー神 BrahmA・ヴィシュヌ神 ViXNu・シヴァ神 Siva の生成・維持・破壊という三神機能説と『リグ・ヴェーダ』で讃えられるサーヴィトリー・アグニなどとニルヴァーナについてクラーク(106)の説を引いて説明している。

書名と発表年、著者から分かることを簡単にまとめたい。『明治・大正・昭和前期 雜誌記事集成』の「東洋史」には二十二文献、「仏教学」には六十九文献、そして、『明治前期思想史文献』には六文献があてはまった。それらのなかで複数回挙がっている文献として、「東洋史」と「仏教学」のどちらにも、高山林次郎の「印度思想の梗概」がある。インド哲学全体については、まず東京大学で「印度哲学」を授業で担当した原坦山に始まる。しかし、原坦山は、インド仏教についての論考が主であり、正統派のインド哲学への言及は少ない。そして、インド哲学全体にわたるものよりも、サーンキヤ学派とヴァイシェーシカ学派に属す漢訳された論書についてまとめたものが先に発表されている。これは、日本人が強かった「漢文」にも、インド哲学文献があるという「発見」があったのだろう。この二つ文献を西洋の学術方法に基づく内容研究はまだ、ヨーロッパでもなされていなかったことにより、一八八八年以降の十年間に、南條文雄を始めとする十四本の発表がある。そして、それら二つの学派に続いた学派はニヤーヤ学派であったが、この学派も、インドにおいては論理学の面で仏教と大いに論争を

していたという過去があり、漢文から探ることが可能であった。まだヒンドゥー教の神学についてはあまり発表されず、ヴェーダについては欧文文献を基に始められたところであった。また、釈尊の出自や生没についても再考がなされている。いずれもヨーロッパの新知識を認めた上での発表が多くあり、反動的なものは明治初期に佐田介石が行って以降なされていない。そして、ギリシア哲学やカントとの比較が既にされていることも挙げておきたい。

以上の諸文献のなかから、哲学館・東洋大学に関連する作者を中心に、管見におよぶ限り、内容を略記し、当時、インド学についてどのような事柄が記されていたかを述べてゆきたい。

原坦山の「印度哲學要領」は、仏教は宗教と翻訳する religion ではなく、「心性哲学」という、人間の心理状況を考察する哲学の一分野とするべきであるという、ヲルゴット(107)の説を引きながら、古代インドで発生した哲学の一つとして「印度哲学」と呼んでも差し支えないとする。そして、仏教の八識と戒定慧の三法と三昧、禅那などの瞑想法について解説する。

また、「印度哲學の實驗」は、「印度哲学」は種々あるけれども、東漸し日本に伝わったのは仏教であるということで、仏教における宇宙と自己との同一を感覚することについて述べるものである。ここでの「実験」は、「実際に経験すること」の意で使われている。その『維摩経』や『楞伽経』に見られる体験から、釈尊がどのように知覚したのかを述べている。

渡邊國武の『印度哲學小史』は *A history of Indian philosophy in epitome* という英語タイトルをつけて、明治二〇年に哲学書院(108)から出版されている。これについての反応として、前述のように井上哲次郎の「渡邊國武氏の印度哲學小史を讀む」がある。

内容は、①総論、②印度哲学第一期に地論師哲学、服水論師哲学、火論師哲学、風仙論師哲学、口力論師哲学、無因論師哲学、③印度哲学第二期に、方論師哲学、時論師哲学。声顯論師哲学、声生論師哲学、非声論師哲学、④印度哲学第三期に識論師哲学、阿頼耶論師哲学、知者論師哲学、見者論師哲学、内知論師哲学、外知論師哲学、能執論師哲学、所執論師哲学、摩納婆論師哲学、常定生論師哲学、補特伽羅論師哲学、瑜伽論師哲学、⑤印度哲学第四期、数論師哲学、勝論師哲学、尼揵子論師哲学、若堤子論師哲学、⑥結論と目次づけられ、本文は四六頁からなる小著である。これらの選択と分類は、漢訳大蔵経典中に見られる印度哲学諸論師の教説を、唯識論、大智度論、楞伽経に現れる外道の説と当時ヨーロッパの学問的成果によって分類し、おおよその歴史的順序に則って、簡略に記したのである(109)。

②の第一期は、ヴェーダ時代を指し、地水火風の四元素を発生源とするものと言葉つまり śabda-māna を基礎とする学派、そして、無因縁説に立つものである。火論師哲学には、インドにおけるアグニを基とする思想と、拝火教と訳されていたゾロアスター教と関連があるといっている。この部分では、ギリシアの元素起原説との比較もされている。③の第二期は、ウパニシャッドの時代に相当し、ウパニシャッド文献の発生論を述べている。④の第三期は、六師外道や「智」についての考察を言う部分となっている。⑤の第四期は、いわゆる六派哲学をヨーロッパの成果を基に解説する部分である。⑥の結論において、仏教はこの後に興ったとする。釈尊の仏教とインド哲学の違いを因縁生と因果に求め、因と縁が和合して果を生じる点が新しいとしている。仏滅後、因縁生の研究をするなかで異論が生まれ、部派分裂が起こった。そして、大乗の経論も発生したが、インドにおいて仏教は滅した。インド哲学は、大乗経典中に沈潜しているので、それを宗教的部分と哲学的部分に分け、哲学的部分からインド哲学を掬い上げる必要があると結んでいる。

村上專精の「印度哲學勝論の概要」は、『勝宗十句義論』を基にしたヴァイシェーシカ学派の概要を記したものである。地水火風空の各元素説や唯心論など発生を論じた各学派の後に生じた、それまでの学説を統合する学派であるとする。本編は八節に分かれている。第一節は、ヴァイシェーシカ学派の概説と『勝宗十句義論』の著者が慧月であることについて三つの注意点が記される。第二節は、ヴァイシェーシカ学派における世界を構成する六種の分類（六句義）がまとめられている。第三節は、六句義の一つ「実」(110)の九種類についての解説である。第四節は「徳」(111)の二十四分類であり、第五節が「実」と「徳」の関係である。第六節は「業」(112)の五分類であり、第七節は、「実」と「徳」と「業」の関係性を記している。第八節が結論にあたり、空間に遍在する地水火風の四元素が、その性質によって偏在することによって分子を生じ、その分子が組み合わさることによって物体になり、そこに思惟は入らないとまとめている。

水谷仁海の「印度宗教の沿革」は、ひと言で言えば、仏伝である。まず、四千年前から婆羅門教があり、婆羅摩（ブラフマー神）・韋紐（ヴィシュヌ神）・死婆（シヴァ神）の三神が万物を生み出し、人を四性に分けた。三千三百年ほど前に、新たに当時のオスマン朝治下において摩西（モーゼ）が、唯一の父なる神が万物を創造し、人は阿當（アダム）と挨窩（イブ）の子孫であるという宗教を建てた。しかし、周の昭王二十六年に、それまでの宗教の背理を正そうと仏が兜率天から降り、生後三十年にして悟りを得て、以後五十年間布教を行い、華厳経、阿含経、般若経、法華経、涅槃経と説いていった。その死後一千二百年にして日本に伝わったが、本国であるインドでは、他の信仰を持つ人びとによって国が滅んだため、仏教も滅び去っているとある。

南條文雄の「印度哲學數論綱領」は、サンスクリットを音写した六派と祖師の関係から説き起こされる。それらのうち、サーンキヤ学派について、カピラ以降の論師の列挙と『金七十論』に基づいた二十五諦の図示があ

る。まとめとして、カピラが説いた学説の要目は、我であるアートマンが固有にして永久ならば、解脱を得たのちにアートマンがどうなるのかの説明がつかないことである。また、サーンキヤ学派は無神論であり、無我をも説く仏教と近い説もあるのは注意が必要であるとまとめられている。

そして、「印度語の沿革及發達」は、『東洋哲學』の目次では「印度語の沿革及ひ發達」、文頭では「印度語ノ沿革及ビ發達」と記されている。内容は、サンスクリットの起源についての伝説とsaṃskṛtaという語の原語における解釈から書き起こす。そして、通俗語としてプラークリット諸語があったこと、ヨーロッパの言語学者のサンスクリットの起源についての説を述べ、第一回が終わる。第二回は、マックス・ミューラーの説を抄訳したものであり、まず文法規則の概観を記し、サンスクリットと古典ギリシア語における単語の音の類似、上座部仏教で使われているパーリ語との関係、当時の英領印度で使われている諸言語があること、そして、後漢明帝の治世時に中国に仏教が伝わった際に、buddhaの音写として「梵」が用いられたので、経典の語が「梵語」とされたことが記される。最後の第三回は、「梵語」が中性名詞brahmanの訳語である「梵」に由来するという説から始める。そして、法顕、玄奘、義浄が旅したときに、サンスクリットを使って用をなしたことが、旅行記中から読み取れることで終わる。

渡邊又次郎の「勝論派の哲學」は、第一章「緒言」は、ヨーロッパにおいて、六つの哲学学派のなかでも、サーンキヤ学派の研究は比較するに多くなされているが、ヴァイシェーシカ学派はなされていない。そして、モニエル・ウイリアムスMonier Williamsが『印度教』Hinduismのなかで、ヴァイシェーシカ学派の論理がヨーロッパの哲学と最も近いということから、ヨーロッパの哲学と要点を対照すると理由を述べる。そして、ヴァイシェーシカという名称を『成唯識述記』から説明する。次に、祖師であるカナーダKaṇādaと『勝宗十句義論』

の著者である慧月らの名を記す。最後に、『勝宗十句義論』という漢訳があることをしるす。第二章「学説」では、十句義がそれぞれ英語でどの語に相当するかを交えながら、『勝宗十句義論』のないよう解説を行っている。その結論として再度それまでの解説の要点を一文にまとめて終えている。

大鳥圭介の「印度古代宗教概論」は、大鳥の講演を筆記し、『日本之教學』に採録したものである。当時の南アジアで信じられていた宗教のなかから婆羅門教、釋教、回々教、事火教の四つを主たるものとして取り上げている。

婆羅門教は、インドアーリアンの故地から説き起こし、ヴェーダの宗教、ウパニシャッドの梵我一如について、ヒンドゥーの三神とヴァルナ varṇa 制度の基づく各階層の務めや社会慣習、さらに六つの哲学学派の概説がある。釋教は、仏教のことであり、釈尊の出自と上座部と大乗のグループとチベット仏教に大別している。以下の二教については、始めにどのような宗教であるかの説明があるが、古代インドで生まれたものではないためか、詳説はない。

淺井豐久の「印度哲學諸派」は四つの章からなり、『東洋哲學』に分割されて掲載されたものである。第一章が印度哲学の起源、附婆羅門教の由来、第二章が印度哲学の種類、第三章が印度哲学の性質、第四章が結論である。

第一章では、婆羅門教のブラフマンは、万物の根本にして一神教における神や仏教における真如のようなものであり、ブラフマンが三様に顕現したものが、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神の三神である。人はブラーフマナ Brāhmaṇa、クシャトリヤ Kṣatriya、ヴァイシュヤ Vaiṣya、シュードラ Śūdra の四ヴァルナが果たす役割が記される。そして、ヴェーダの宗教の概略が記され、哲学的思弁は、釈尊が生まれる少し前に始まっ

た。儀式的宗教は、多数の信者に対する表面であり、哲学的思弁は、少数の知者に対する裏面であるとまとめられている。

第二章では、まず釈尊以前の婆羅門教を、第一期の自然崇拝的段階、第二期の儀式的段階、第三期の思弁的段階と宗教進化論的に配するとともに、初期ギリシア哲学との比較をしている。次に大蔵経に見られる外道とヨーロッパのサンスクリット学者による六つの哲学学派を比較し、最後にヴェーダーンタ学派に属し、二元論を唱えてシャンカラ派と論争したマドヴァ Madhva が記した十五派の名称を列挙している。

第三章では、ニヤーヤ学派、ヴァイシェーシカ学派、サーンキヤ学派、ヨーガ学派、ミーマーンサー学派、ヴェーダーンタ学派の順に六つの哲学学派の説を、『勝宗十句義論』と『金七十論』や、サンスクリット学者の解説をもとに記している。

2．『外道哲学』概観

学問的蓄積があったヨーロッパを視界に入れずに、日本にある文献のみを使って、日本に伝わったインド哲学をまとめたものであっても、『外道哲学』が出版された明治三十年という年は、インド学についての文献の発行年としては早い時期の文献である。このことは、日本に伝来していた経論を基にして、仏教の思想展開を考察する目的で記された論文の一部を構成していたため、ヨーロッパを取り入れなかったといえる。

繰り返しになるが、円了は、「仏教哲学系統論」で博士の学位を取得し(113)、明治三十（一八九七）年にそのうちの第一編として『外道哲学』という書籍をまとめている。なぜ『外道哲学』が第一編となるかについては、日本仏教といっても淵源は古代印度にあるので、インドの哲学思想について仏教とその他の外道に分ける。そし

て、日本に系譜が伝播していない外道についてから始め、最終的に日本仏教の系統に至るとしている。

また、その考察範囲については、『外道哲学』の緒言で、「仏教哲学系統論」における「仏教」とは日本仏教を指すので、「現今わが国に存する仏籍により、ひろく諸説所見を彙類概括し、もってその裏面に貫通せる哲学的系統を考定開示せり。これをもって、その引用および参考書類はみな、古来日本において翻刻あるいは新刊せるものに限り、西洋印行の仏籍、あるいはこれに関する泰西学者の評論・著作等はこれを除く」(114) と、宣言している。日本国内で供覧されている仏教文献をもとに、日本仏教の思想的宗派的な違いを論じようということである。この日本にある文献のみを使うことについては、後の目標として、「仏教の真相を発見」(115) しようと考えているが、まだ「日本仏教全体の系統を叙述せるものも」(116) 聞いたことがないので、まず仏教から哲学的真理を極める第一段階に、日本仏教思想史として、「仏教哲学系統論」をまとめたからであると説明している。

では、その内容を概観したい。「緒論」では、四性制度、五明、ヴェーダの概説を記す。「総論」では、「外道」と仏教で呼ばれる仏教以外の学派の種類と仏教との関係が記される。以後、各論になるが、まずその学派の宇宙創生が唯物的であるか唯心的であるかによって客観的と主観的に分け、さらにそれぞれを一元論と多元論に分け、四つの「各論」がある。仏説で外道と取り上げられた学派を、四つに分類した理論に当てはめ、各説を解説していく。最後に「結論」として、ブラフマンとアートマンについて、実有について、涅槃についての三観点からまとめている。

3. 円了のインド哲学

ところで、円了に、インド哲学に関する論文著作は『外道哲学』以外にどのくらいあるのだろうか。円了によ

る他のインド哲学に対する記述を確認しておきたい。

東洋大学発行の『井上円了選集』では、『哲学要領』（明治一九年九月発行）中の「第四段インド哲学」が第一巻にあり、七巻収録の文献には『純正哲学講義』（明治二五年十一月―二六年十月発行）(117) の「東洋哲学」のなかに「インド哲学」がある。そして、『外道哲学』以降に記された文献として、『印度哲学綱要』（明治三一年七月発行）(118) と『仏教理科』（明治三八年一二月発行）(119) が同七巻にある。以上の『哲学要領』、『純正哲学講義』、『印度哲学綱要』、『仏教理科』の四点の特徴を『井上円了選集』から概略したい。

まず、『哲学要領』は、「第二段東洋哲学」で大まかにインドと中国にも独自の哲学思想があるといい、「第四段インド哲学」に進む。神の意志による世界創造を信じるミーマーンサー学派とヴェーダーンタ学派が含まれる信神教、神を立てない仏教が入る不信神教、中間的なサーンキヤ学派とニヤーヤ学派ならびにヴァイシェーシカ学派の三つに分ける。ここでは、信神教をいう婆羅教と仏教をいう釈迦教について論じる。婆羅教では、鶏卵説による宇宙創生のみを取り上げる。釈迦教では、日本仏教の各宗派が、哲学の分類に従うとどのようなものにあたるかが記され、最後に、ヨーロッパの哲学者が唱えた学説との類似を記している。

また、『純正哲学講義』は、「総論」でペルシア、エジプトの思想も東洋哲学に含められるが、後世への影響という点から見ると、中国とインドの古代思想が双璧であるとして、研究状況の概説がされる。「インド哲学」では、インドの西暦一〇〇〇年以前の歴史は、他国との交渉がない事柄については詳らかではないという断りから始まる。インド思想は、婆羅門学派としているヴェーダについての学問が始まりにあり、それを正統ヒンドゥーのミーマーンサー学派とヴェーダーンタ学派が含まれる信神学派、仏教とジャイナ教が含まれる正統ヒンドゥーから見れば異端である不信神学派、六学派のうちのその他四学派がヒンドゥーに入るが信仰の度合いが薄い中間

学派というように三つに分ける。そして、当時のインドの社会で信じられていたヒンドゥー教と五時教判に基づく釈尊の一代記が仏教として記されている。

次に、『印度哲学綱要』は、『外道哲学』の内容を簡略化した「綱要書」であり、日本の仏教各派各宗における僧侶養成の中等教育に適用するという方針で、一年間の講義のために記されていることもあり、三十三の章に試験問題、サンスクリット漢訳対照表がつく。引かれている文献は、『外道哲学』同様に大蔵経典のみである。『カウティリーヤアルタシャーストラ』などで見られるように、古くからインドで分けられている学問分野の大枠である五明の各論から始まる。次に、ヴェーダとウパニシャッドの構成を説き、釈尊在世時までに表れた諸学派の学説を分類分けし、一つずつ解説していく。そして、六つの哲学学派のなかでもヴァイシェーシカ学派とサーンキヤ学派の説を漢訳文献に基づいて説明し、仏教と関連するヴェーダの権威を認める思想についてまとめている。

最後に『仏教理科』は、仏教の文献に書かれている理系的といえる教理以外の事柄について講義した内容をまとめたものである。インド学関係は、「第四講　開闢論」のなかの「第一段　外道開闢論第一梵天自在天」と「第二段外道開闢論第二数論勝論」である。前者には、ヴィシュヌ神による宇宙開闢神話、原人プルシャ解体神話、シヴァ神による宇宙開闢神話の三つが採られている。後者では、サーンキヤ学派のプラクリティが展開し諸物が生まれたという説とヴァイシェーシカ学派の多元論があることが記されている。上記の箇所以外でも、学問分野については、ヒンドゥーの分類も仏教の分類も同一であることが記され、『金七十論』と『勝宗十句義論』が期に応じて用いられている。

さらに、選集に収められていない論文を管見の及ぶ範囲で略記し、円了のインド哲学に対して、とくに興味を

持った範囲を見てゆきたい。そのようなもののなかに「印度外道の名數」がある。これは明治二九年八月発行の『東洋哲學』第三編第八号に発表された二頁ほどの小編であり、漢訳仏典で述べられている、いわゆる六師外道に代表されるインドの学問系統が九十五や九十六あるという説を、『薩婆多論』、『維摩経』と『涅槃経』、『真言教誡義』、『義林章纂註』の四つから挙げ、その数の区分は、中国における百家のように、多数の学問学派があったことを示すが、具体的な派がその数であるということをあらわすのではないというものである。

4. まとめ

明治二九年までのインドに関する研究発表と円了のインド哲学に関する発表を見てきたが、ヨーロッパの研究成果を紹介するように、学説を引用するもの、漢訳された語がサンスクリットで何といったのかの対照を中心とするもの、漢訳された仏教以外の文献を使ってインド正統派の学問について考察するもの、以上の三種類が見て取れる。円了の立場は、これらのうち最後の漢訳文献を使用するものである。それは、『外道哲学』に明記していることもあるが、その他の文献においても、ヨーロッパの哲学と比較して記述する場合を除けば、堅持している。この時期のインド学文献は、単行本として出版されたものはまれであり、ほとんどは雑誌に掲載されたものであり、長く渡るものは連載形式で掲載されたものである。インド学とは限らないが、過半数の雑誌に円了の発表がある。また、他の発表者も円了と知己が多い。また、分野は、仏教であっても釈尊についてのように場所がインドであることが分かる場合に「印度学」としているものがある。そして、個別の哲学学派については、井上哲次郎がニヤーヤ学派と六師外道のニガンタ・ナータプッタ Nigaṇṭha Nātaputta の違いを発表した以外は、サーンキヤ学派とヴァイシェーシカ学派に限られる。

そのような時代状況において、円了は、『哲学要領』などの初期の著作では、六つの哲学学派と仏教、ジャイナ教を宇宙創生と神観念の面から三つに分ける考え方をとっていた。けれども、『外道哲学』において六つの哲学学派以外の思想も加えて分類する際に、宇宙創生を唯物論と唯心論の二つに、一元論と多元論を組み合わせた四つに分類するものに変わった。この変化後の分類方法は、ヨーロッパ哲学の分類方法を応用した、それまでのインドと日本では行われなかった分類方法である。円了も「印度外道の名數」で数え上げているが、仏説のなかで挙がっている九十六の外道説を一つずつ分類し、分析することは、まだ誰一人として行っていなかった。このような観点から行った研究であるというだけでも、博士号請求論文に相応しいと思われる。

【註】

(1) 「円」の字について、戸籍では「圓」となっており、刊本では一般に旧字の「圓」が使われているが、哲学堂公園にある「哲學關」と記された標柱の裏側に彫られた名前は、国構えのなかが口の下に貝ではなく、ムに貝を使う僧職がよく使った文字が使われている。弟の藤井圓順も、東洋大学所蔵の『哲學館大學紀念堂即哲學堂來観諸君名簿』の自署において、この特殊な「円」の字を使っている例があるが、円了におけるこの文字の使い分けについては、不明である。以下、固有名詞については、その記載を尊重した。

(2) 本稿で使用する『外道哲学』は、井上円了著、井上円了選集等編集委員会編『井上円了選集』第二三巻、東洋大学、二〇〇三年である。同書の解説には、立川武蔵「井上円了の『外道哲学』」(六八八―七〇六頁)、清水乞「井上哲次郎「インド哲学史」草稿と井上円了の『外道哲学』」(七〇七―七四三頁)が付されている。

(3) 『井上円了選集』第十三巻一六〇頁から一六一頁にある『西航日記』のなかの上海における記述で、日本人の欠点を挙げながらも、優越感から「日本人の心は富峰とともにきよし」として大清国と諧謔するとともに、「日本人の気質七匁にシナ人の気質三匁を調合」すると「東洋の人物のやや完全なる者を得」る、と記している。

(4) 当時の地名表示はカルカッタ。

(5) 安政六（一八五九）年、越後国与板に生まれた浄土真宗本願寺派僧侶、円了と同じ頃に現在の新潟県立長岡高校に通い、また、慶応義塾や東京大学で学んでいる。このときは大谷光瑞が指揮した探検隊の一員として、インドに渡っていた。奇しくも清澤満之と同日のこの翌年である一九〇三（明治三十六）年六月六日に、ロンドンへ赴く途中のマルセイユで客死した。

(6) 『円了選集』第二三巻、一七六頁より。

(7) 同右、一七六頁、一〇行目。

(8) 井上円了著、井上円了選集等編集委員会編『井上円了選集』第十三巻、東洋大学、一九九七年、三三四頁、二―五行。

(9) 同右、三四三頁、二行。

(10) 井上円了著、東洋大学創立一〇〇周年記念論文集編纂委員会編『井上円了選集』第三巻、東洋大学、一九八七年、三三一頁一五行。また、『仏教活論序論』の現代語訳として、井上円了著、佐藤厚訳『現代語訳仏教活論序論』大東出版社、二〇一二年がある。

(11) 『井上円了選集』第三巻三三二頁において、円了自身については、「学者の地位にあたるものは、護国のために真理を愛せざるべからず。その真理を愛するはすなわち国家を護するものなり」といいながら、「真理を講究していささか国家のために尽くす」ので、「愛理を先にして、護国を後にするもの」であり、今は真理を求めているといっている。

(12) 佐々木隆『明治人の力量　日本の歴史二一』、講談社学術文庫、二〇一〇年、「序章　不羈独立を求めて」九―二三頁によった。

(13) 初めて日本に渡来した南アジア出身者は、『続日本紀』に記述がある菩提遷那（七〇四年―七六〇年）である。菩提遷那は、奈良時代の天平八（七三六）年に玄昉らが帰朝した際に同船し、東大寺大仏の開眼導師を務め、僧綱で僧正に位したため婆羅門僧正と呼ばれた。一方、日本から南アジアに渡った最初の人は、ルイス・フロイスの『日本史』六巻によれば、一五四九年にゴアで洗礼を受けた後、フランシスコ・ザビエルの通訳を務めたヤジロウであ

るとされる（松田毅一、川崎桃太訳『フロイス日本史6 豊後篇Ⅰ』中央公論社、一九七八年、一七―一八頁）。また、又引きになるが、加藤祐三『幕末外交と開国』（講談社学術文庫、二〇一二年）の七五頁には、シーボルトの『日本』にたいするブリッジマン之英文抄訳の解説で「日本人は、原始時代以来膨大な数の船舶を有し、中国人と同様に商人達は近隣諸国を往来・交易し、その足跡ははるかベンガルにまで及んでいた」とある。しかし、宮内庁三の丸尚蔵館編『明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」―四五〇〇余名の肖像』（菊葉文化協会、二〇一三年）八四頁のキャプションでは、何に依ったか分からないが「インドへ初めて上陸した日本人とされる島地黙雷」とある。その他に遣隋使・遣唐使の随員として大陸に渡った人々の中で南アジア人と交流持ったことが分かる事例として、空海が、長安において善無為から、サンスクリットを習ったということがある。

(14) 漢訳による用語では勝論学派。

(15) 漢訳による用語では数論学派。

(16) 井上円了著、東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第二二巻、東洋大学、二〇〇三年、二十四―三十七頁。

(17) 『円了選集』第二二巻、左二十―三十五頁。

(18) 同右、左三十六―四十四頁。

(19) 同右、左四十五―五十二頁。

(20) 同右、左五十三―七十頁。

(21) 那珂に対して、明治三〇年、井上哲次郎は「釋迦種ノ起源ニ關スル考證」を『太陽』三巻六号、七号発表し、答えた。

(22) 『國家雑誌』六〇―六三号、一八九二年。

(23) 『國家雑誌』七七号、一八九三年。

(24) 『國家雑誌』八七号、一八九四年。

(25) 『哲學雑誌』七巻六八号、一八九二年。

(26) 『佛教史林』一巻一―二号、一八九四年。

(27)『佛教史林』一巻三、五号、一八九四年。
(28)『佛教史林』一巻六、八号、一八九四年。
(29)『東洋哲學』二巻一号、一八九五年。
(30)『東洋哲學』一巻一―二、五号、一八九四年。
(31)『太陽』一巻八号、一八九五年。
(32)『東洋哲學』一巻四号、一八九四年。
(33)『禪宗』一五―一七、一九―二〇号、一八九六年。
(34)石山洋 他編『明治・大正・昭和前期 雑誌記事集成 人文科学編 第三九巻 東洋史二』、皓星社、一九九七年、三三八―三五四頁。
(35)『日本之教學』一四号、一八八八年。
(36)『ゆにてりあん』一六号、一八九一年。
(37)『東洋哲學』二巻三号、一八九五年。
(38)『教學論集』二六、二七号、一八八六年。
(39)『佛教史林』三巻三〇号、一八九六年。
(40)『哲學雑誌』七巻六五号、一八九四年。
(41)『東洋哲學』一巻二号、一八九四年
(42)『教學論集』二八、二九、三一号、一八八六年。
(43)『日本之教學』六号、一八八八年。
(44)『六合雑誌』九二、九三号、一八八八年。
(45)『日本之教學』一八号、一八八九年。
(46)『佛教』四〇、四六号、一九九二年。
(47)『佛教』五五―五九、六一、六三―六四号、一九九五年。
(48)『無盡燈』一巻三、五、八、一〇号、一八九六年。

(49)『六合雑誌』一八二号、一八九六年。
(50)『宗教』六二号、一九九六年。
(51)『六合雑誌』九九号、一八八九年。
(52)『哲學雑誌』九巻八五、八七号、一八九四年。
(53)『六合雑誌』一六九、一七一、一七四、一七六、一七七、一八〇号、一八九五年。
(54)『東洋哲學』三巻三号、一八九六年。
(55)『東洋哲學』三巻五号、一八九六年。
(56)「印度古代の宗教の發達」を記した菅虎雄だと思われる。
(57)『密嚴教法』一〇九、一一一号、一八九四年。
(58)『太陽』二巻一、二号、一八九六年。
(59)『東洋哲學』三巻一号、一八九六年。
(60)『無盡燈』二巻三号、一八九六年。
(61)『哲學雑誌』八巻八二、八三号、一八九三年。
(62)『東洋哲學』二巻二—四号、一八九五年。
(63)『佛教』九〇号、一八九四年。
(64)『密嚴教法』一〇八号、一八九四年。
(65)『密嚴教法』一一五—一一七号、一八九四年。
(66)『密嚴教法』一一〇号、一八九四年。
(67)『東洋哲學』二巻二号、一八九五年。
(68)『東洋哲學』二巻三号、一八九五年。
(69)『哲學雑誌』一〇巻九九、一〇〇号、一八九五年。
(70)『太陽』二巻六号、一八九六年。
(71)『無盡燈』一巻六、八号、一八九五年。

(72)『宗教』三六、三七号、一八九四年。
(73)『傳燈』一―三、五―八号、一八九〇年。
(74)『哲學雜誌』七巻六五号、一八九二年。
(75)『哲學雜誌』二巻一三号、一八八八年。
(76)『教學論集』五〇号、一八八八年。
(77)『日本之教學』七号、一八八八年。
(78)『哲學雜誌』七巻七〇号、一八九二年。
(79)『傳燈』三九号、一八九三年。
(80)『六合雜誌』一五五、一五六号、一八九三年。
(81)『密嚴教法』一一九、一二二、一二四―一二六、一二八、一三一―一三四号、一八九四年。
(82)『東洋哲學』一巻九―一〇号、一八九四年。
(83)『哲學會雜誌』一巻三号、一八八八年。
(84)『日本之教學』六号、一八八八年。
(85)『東洋哲學』一巻四、七―八、一一号、一八八八年。
(86)『佛教』六〇、六二、六七号、一八九三年。
(87)『密嚴教法』一〇九号、一八九四年。
(88)『佛教史林』一編三号、一八九四年。
(89)『佛教』一一六号、一八九六年。
(90)『宗教』四〇、四四号、一八九五年。
(91)『東洋哲學』三巻四、五号、一八九六年。
(92)『東洋哲學』二巻四号、一八九五年。
(93)『東洋哲學』三巻一号、一八九六年。また、ヴィエカナンダはヴィヴェーカーナンダのことである。
(94)『東洋哲學』一巻一一号、一八九五年。

(95)『傳燈』一八号、一八九二年。
(96)『太陽』二巻七号、一八九六年。
(97)『太陽』二巻一九号、一八九六年。
(98)『東洋哲學』三巻八号、一八九六年。
(99)『哲學雑誌』七巻六〇号、一八九二年。
(100)石山洋 他編『明治・大正・昭和前期 雑誌記事集成 人文科学編 第四〇巻 仏教学一』、皓星社、一九九七年、五〇〇—五一五頁。
(101)三橋猛雄著『明治前期思想史文献』、明治堂書店、一九七六年。
(102)弘化三（一八四六）年—大正八（一九一九）年、信濃国高島藩出身、子爵、第二次、第四次伊藤博文内閣の蔵相（中村元・武田清子監修『近代日本哲学思想家辞典』、東京書籍、一九八二年）。『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上（東洋大学創立一〇〇年史編纂委員会・東洋大学創立一〇〇年史編纂室編、東洋大学発行、一九八八年）七七頁、「四六私立哲学館設立賛助者」（『哲学館講義録』第三期第二年級第二四号、明治二四年六月）に氏名が挙がっている。本書は二度目の大蔵大臣を辞めた後にまとめたもの。兄の千秋も伯爵となった。
(103)文政元（一八一五）年—明治一五（一八八二）年、肥後出身の真宗僧。西洋文明を使った佛教排撃に対し、須弥山説擁護の論陣を張り、政府に建白書を提出するなど、保守反動的な運動をした（中村元・武田清子監修『近代日本哲学思想家辞典』、東京書籍、一九八二年）。近年の佐田介石の思想については、常塚聴の「近代仏教における世界観と社会観：真宗僧佐田介石を中心として」『宗教研究』八五巻四号、日本宗教学会、二〇一三年、一二〇八—一二〇九頁。「真宗僧佐田介石における護国思想と護法思想：須弥山説を巡って」『宗教研究』八四巻四号、日本宗教学会、二〇一二年、一二〇二—一二〇三頁。「近代日本における仏教と科学：真宗僧佐田介石を例として」『宗教研究』八三巻四号、日本宗教学会、二〇一一年、一四二七—一四二八頁など、近年研究が多くされている。
(104)原物は国立科学博物館にて展示されている重要文化財である。
(105)三橋猛雄編『明治前期思想史文献』、明治堂書店、一九七六年、三〇三頁。
(106)クラークの氏素性は不明である。類推をすれば、石川舜台が明六社の社員であったこともあり、日本に来ていたク

ラークのなかから考えると、東京開成学校で教えていたエドワード・ウォーレン・クラーク Edward Warren Clark であろうか。

(107) どのような人物かは不明だが、例えば、国立国会図書館所蔵の伊東武彦編『新演説』第一集（大成館、一八九〇年）と『大家演説』（東雲堂、一八九〇年）においてともに「教育の真目的」という発表が掲載されているヲルゴットがいる。また、後者には、円了も「哲学必要論」も掲載されている。

(108) 出版社は哲学書院であり、出版人は円了である。

(109) 渡邊、二頁四―七行

(110) 現在は「実体」dravya とする。

(111) 現在は「性質」guṇa とする。

(112) 現在は「運動」karma とする。

(113) 山内四郎「井上円了の学位に就いて」『井上円了研究』1、東洋大学井上円了研究会第三部会、一九八六年三月、改訂正版。山内四郎「井上円了の学位に就いて（訂補）」『井上円了研究』5、東洋大学井上円了研究会第三部会、一九八六年三月。

(114) 『円了選集』第二二巻、一四頁七―十行。

(115) 同右、一四頁十一行。

(116) 同右、一四頁十三行。

(117) 該当箇所は、井上円了著、井上円了選集等編集委員会編『井上円了選集』第七巻、東洋大学、一九九〇年、九七―一〇三頁。

(118) 該当箇所は、井上円了著、井上円了選集等編集委員会編『井上円了選集』第七巻、東洋大学、一九九〇年、一八三―二九五頁。

(119) 該当箇所は、井上円了著、井上円了選集等編集委員会編『井上円了選集』第七巻、東洋大学、一九九〇年、三三三―三四六頁。